

日本における騒音科学の歴史的展開

—科学と行政をめぐる「正統性」の社会学的分析—

大門信也（法政大学大学院兼任講師）

日本の騒音科学は、ニューヨーク市における大規模な騒音調査を契機として、1920年代末より発展してきた。戦後になると騒音の研究者たちは、1950年代中盤より各地方自治体で制定された騒音防止条例や、60年代後半から70年代前半にかけて行われた国の騒音対策制度の形成など、様々な形で政策過程に関わるようになる。また、こうして形成された行政組織と科学者集団との関係は、70年代後半以降になると工学系学会を通じて強化され、現在に至っている。

P. ブルデューによれば、科学者集団や官僚組織は、それぞれ独自の認識枠組みと序列性を有する「界」に埋め込まれており、正統な立場の獲得をめぐる闘争を繰り広げているという。では、科学者集団と官僚組織との相互作用が顕著に見られる公害規制の領域において、界はいかなる様相を呈してくるのであるか。またその中で、「正統性」はいかにして維持され得るのであるか。本報告ではこれらの点を、騒音に関わる科学界の成立過程とその独自の認識枠組み、また騒音の規制をめぐる科学界と官僚界とが混交し独自の界を形成する過程に着目して、明らかにしてみたい。